

東京の地震

一、緒言

二、地震と市街地

三、東京（江戸）に起りし歴史的の地震

四、東京市街に於ける震動の強弱

五、東京附近の震原地

六、東京に起るべき今後の地震

附 地震に際しての注意

地震を人間の感覚によつて區別すると、無感地震と有感地震との二つとなります。無感地震と云ふのは、人間に感覚を興ふる事なく單に機械でだけ記録されるもので、局部的の微震、若くは遠地地震等であり、有感地震と云ふのは、人身に感覚を興へるもので、輕微なもの、方が數の多いのは申す迄もありませんが、稀には激烈なものが起りまして家屋を破壊し、人畜の死傷を來す様な事もあります。斯う云ふ慘害を逞うする程度の地震を、激震、又は、大地震と申します。明治九年から大正四年迄、四十ヶ年の觀測に依つて見ますと、東京では年々約百回の有感地震がある譯になります。勿論、是より少い時もありますが、明治廿九年の如きは餘程頻繁で、二百廿五回もあつた相です。是で見ると少くとも十日に一回、多い時は連日地震が起ると云ふ様な事となります。今年に幸に今日迄の處、有感地震が一二回しかありませんが、昨年十一月御大典の時分には中々頻繁で、同十六日御大饗第一回の日の如き、東京で數回の地震があつて、内二回は可なり

強かつた爲め時節柄心配した人も澤山あります。中には大地震が有るのでは無いかと、貴重な物を肌身に着けて驚破と云ふ場合には逃げ出す用意をして寝た人さへあると云ふ事です。斯様に地震と云ふものは度々ある事で、而も私達を大變驚かすものでございます。で、是から少しく東京の地震の事に就て、之を綱目に分けて御話して見様と思ひます。先づ初めに地震と市街地の事に付て申し上げます。

都會は地價が高いから、家を建てるにも面積を取らないで高さを高くするので、二階三階の家、夫より以上の高い家が多くあります。それで、地震がありますと高い家は平屋建の家よりも破壊され易くございます。又都會の家屋は所謂借家普請で、其建方の粗末なものも少くありませんから、従つて地震に對して危険であります。又都會は人口が密でありますから、大地震の際に死傷者の多く出るのは當然のことであります。又、人家が稠密で空地が少うございますから、避難すべき場所が少い。それで、家が倒れてそれが爲めに死んだり、傷を受けたりする人が比較的多うございます。家屋の稠密は、又、地震後火事が起ると割合に大きな火事となります。明治三十九年のサンフランシスコの大地震の損害は、主として火事の爲めであつたと云ふてもいゝ位でございます。多くの場合に於ては、水道鐵管及瓦斯管が無數に布設してありますので、大地震の時に其れが破壊されて大損害を興へます。此の害は中々大きいので、水道鐵管の幹線が破裂しますと一時給水する事が出来なくなるのは勿論であります。目下の東京市は消防用水も主として水道に依つて居るのでありますから、火事が起りました場合には水不足では如何ともする事が出来ません。如何に熟練な消防夫でも、見す見す手を束ねて焼け擴るのを見て居るより外はありません。東京市の水道は明治三十一年以後給水を始めたものですから、明治二十七年六月二十日の地震の時には水道の害はありませんでしたが、今後

此の程度の地震が若しありますならば、其損害は如何でありませうか、誠に寒心に堪へません。又飲料水にも欠乏を起しますから其時が夏でありますと、不良の水を飲んだ結果悪疫流行等と云ふ事になるでございませう。瓦斯管の破裂は水道鐵管の場合に比して、直接に我々の受ける損害は少いと見て差支へはありませぬけれども、何分地震の際には人々が多くあわて、居りますから、案外火災等の如き危険な事が生じないとも限りません。

次に江戸に起りました歴史的の大地震に付きて申し上げます。慶長以後江戸に起つた地震の中で、多少破壊的であつたものが十四回あります。其内最も惨害の多かつたのが次の三回で、第一慶安二年六月廿日（太陽暦で七月廿九日）夜半の二時頃に起つたもので、市内に於ける死者の数は千人内外でありました。瓦屋根の家が澤山破壊されたので瓦を使用することを禁ずる様にしました。又、上野の大佛の頭の落ちたのも此地震の時です。震原は陸地内で荒川筋附近にあつたものらしいのですが、江戸からは可成り遠い處と云ふ事です。第二元禄十六年十一月廿三日、太陽暦に直すと十二月卅一日即ち大晦日の夜半二時頃に起つた地震で震動の最も激烈であつたのは江戸、神奈川、鎌倉、大磯、小田原、箱根、房州等で、日光や静岡になると少しも損害はなかつた様であります。又地震後津浪がありまして、東京灣沿岸の地は可成りの損害を受けました。

地震の惨害は申す迄もなく江戸が第一でありました。新井白石先生の著した、「折りたく柴の記」にも記事があります。櫻田、本所、芝、新堀端等には大きな地割が出来ました。數寄屋橋見附が崩れて、そこ丈でも四十人許り死人を出しました。其外所々見附が崩れたり、櫓が崩れたりしたのは無數であります。大名旗下の

邸宅町屋も多數崩れまして、澤山の死傷者がありました。地震後數ヶ所から火事が出ましたが、大方直ちに消し止た爲め大事に至りませんでしたのは、不幸中の幸でありました。

此地震の震原は房州から近い太平洋の海底から起つたもので可成り激烈なものであつたけれども、當時江戸の市街は今日の如く大發展を遂げて居らなかつたのは、勿論安政年度に比しても餘程區域狭く、未だ深川は人家も少く市内に編入されて居らず、其他の低濕の地にも家屋が少かつた時代でありますから、破れ家死人等の數は安政の地震の時に比較すると少かつたのであります。第三安政二年十月二日太陽暦では十一月十一日夜十時頃に起つた地震で、所謂安政の江戸の大地震として著名なものです。震原は亀井戸市川附近が中心で、直徑六七里の地方は家屋倒れ人畜に死傷があつた。江戸に於ける被害は全壞家屋一万七千四百四十四軒で、此外火災にかつた所は凡そ十四町四方、死者の數は町人四千六百廿六人、士分二千百卅一人、合計六千七百五十七人でありました。即ち、元禄の地震に比して一層損害が多大でありました。其理由は震原が近かつたのにも因りますが、一方から考へて見ると元禄の時よりは市街が大いに發展し、人家櫓比し、埋立地の如き弱き地盤の處に澤山の家が建てられた等に因る結果であります。此地震の記事は當時既に「安政見聞誌」其他二三の著述も出た位で、比較的よく解つて居ります。藤田東湖先生が歴死せられたのも此時です。此地震の後火事卅餘ヶ所から出ましたけれど、火事の都とも云はれる江戸の消防夫が熟練の結果、明方迄には皆消し止めたので、火災の損害は比較的に少くして済みました。而し、本所深川の一部の如き埋立地は、非常な打撃を被りまして見るに忍びない慘狀を呈したのであります。次に付け加へて置きたい事がございませぬ。それは明治廿七年六月廿日の地震でありまして、東京が帝都となりましてから初めて起つた大きな地震で、

且つ又安政二年の地震此方の大地震であります。そして其震源も、安政のものと同じく東京の東北部に有つたのであります。此時家屋の全く破壊されたもの九十家、多少損害を受けたもの約五千家、煙突の倒れたものが三百八十許り、多少損じたものが四百八十許りで、此時には晝の二時少し過に起りましたから、幸に火事も起らず、死傷者も少く、死者廿四人、重軽傷者百五十七人と云ふ風でありました。當時は未だ水道の布設等ありませんでしたから、其方の損害は餘りありませんでした。此位の程度の地震でありますと、水道鐵管の破壊は多少ある可きでございます。(文二ノ三 平、神、天野)

お互の便利の爲、且つ、なるべく多く人の利益の爲、本誌は次號から特に質問欄を設ける事に致しました。本校の諸先生にお尋ねの事などが御座いましたら、盛に此の欄を御使用下さいませ様にお願い致します。(編輯係)

報 告 (3の1)

大正四年度我國に於ける文學、哲學、倫理及び教育の趨勢の概要を報告せん。

先づ先年度に於て吾人が意外に感ずるものは、文學界一般の不振なりしことなり。然りと雖もその沈靜なるの中に、亦新しき研究の擧ぐべきものも少からず。即ち國語國文の研究に於て、與謝野晶子氏の「新譯榮華物語」佐々木信綱氏の「和歌史の研究」坪内孝氏の「新譯徒然草」尾上先生の「短歌新講」内海弘藏氏の「平家物語評譯」等見るべきものあり。其他「國學院雜誌」「藝文」「帝國文學」等に現はれたる評論、「心の花」の万葉號の如きは、斯道研究に少からぬ便益を與へたり。更に帝國文學に連載し始められたる、故森治藏氏の遺著たる「國文學者年表」は、赤堀又次郎氏の「日本文學者年表」の後を續ぎしものにして、國文學上に至大の貢獻をなすものといふべし。更に國語學方面に於て劃期的の大作は、上田、松井兩氏の「大日本國語辭典」の刊行なり。この書は未完なれども發行せられし部分のみにてすら、從來國語字典の不完全を啣ちし吾人をして、大に力を強うせしむるものあり。又保科孝一氏主幹の雜誌「國語教育」の發刊の如きは事本年一月に屬すと雖も國語及國語研究の機運の漸く熟せるを見るに足り欣喜に堪へざるなり。此外一時旺りし外國文學の翻譯も漸くすたれて却つて新日本主義、新民族主義運動の起らんとする傾向を示せり。これ歐洲戰亂の影響により